

「東海村原子力安全フォーラム」

JCO臨界事故を教訓として、ともに考える

東海文化センター
入場無料

このフォーラムは、原子力分野の関係者ほか多くの皆さんが一堂に会し、貴重な知見等に接し考えることを通して、安全文化の醸成と防災思想の徹底を発信し、将来にしっかりと教訓を引き継ぐことで、原子力においては“安全が何よりも優先する”という原点を一層深く浸透・追求していくため、講演会形式で開催するものです。

講師▽村上 達也さん(前東海村長)▽田中 俊一さん(飯館村復興アドバイザー／前原子力規制委員会委員長)▽福嶋 浩彦さん(中央学院大学教授／元消費者庁長官／元我孫子市長)▽桐嶋 健二さん(株式会社ジェー・シー・オー代表取締役社長)

その他▽残席がある場合は、申し込みをしていない方

の入場を先着順で受け付けます。▽車でご来場の際は、JR東海駅東の日本原子力研究開発機構本部駐車場(舟石川765-1)に駐車の上、シャトルバスでお越しください。※詳細は、「広報とうかい」(8月10日号)をご覧ください。

申し込み・問い合わせ▼「広報とうかい」(8月10日号)に掲載の申込書に必要事項を記入の上、8月26日(月)(当日消印有効)までに、郵送・メール・ファックスのいずれかで、防災原子力安全課消防防災・原子力安全担当(☎282-1711 内線1525 FAX270-4418 ✉bousai@vill.tokai.ibaraki.jp)へ申し込みください。

ふるさと歴訪
―歴史を再発見―

塩づくりの“ムラ” 村松白根遺跡

東海村文化財保護専門員

川又 清明

皆さんは、「チチンプイプイ痛い痛い痛い飛んで行け」というおまじないを知っていますか。「チチンプイプイ」には、「何もかもなくなる」とか「景色が一変する」という意味があるそうです。

東海村からひたなか市阿字ヶ浦にかけて砂浜が続いており、この辺りにはチチンプイプイという言葉の響きに似た「千々乱風」の話が伝わっています。今から約300年前の江戸時代初めごろ、大風が吹き続け、村が砂に埋まってしまったという話です。村松虚空蔵堂には、それを裏付けるような「村が砂に埋まって大変なので移住させてほしい」という、村人からお願いの文書が残っています。今回は、この話が伝わっている東海村村松白根の、塩づくりの話

村松白根では、「大強度陽子加速器施設(J-PARC)」の建設が計画されたのを機に、平成15年4月から平成16年8月にかけて、発掘調査が行われました。この調査により砂丘を掘り下げたこと



(公益財団法人茨城県教育財団 提供)

で、白い砂の中から真っ黒な広がり(写真や粘土が貼られた大きな穴などが出てきました。塩づくりの「釜屋」の跡です。

塩を作るときは、海水をくみ上げて砂にまく作業を何度か行います。砂が乾いたら、塩の付いた砂(鹹砂)を集めてざるや桶に入れます。その上から海水を掛けて濃い塩水(鹹水)を作り、粘土を貼った大きな穴(鹹水槽)にためます。この鹹水を煮詰めて塩を作った場所が、釜屋(写真の黒い広がり部分)です。

発掘調査の結果、井戸跡や建物跡も見つかりました。建物跡からは、できた塩の量を計ったであろう銚や、計った塩の量を記録するための墨をすった硯、さらに、お皿や火打石、火打金、サイコロ、かんざし、古銭、お面なども見つかりました。このような遺物から、「村松白根遺跡」は15世紀中頃から17世紀初めごろにかけての「塩づくりのムラ跡」であると分かります。

この遺跡の遺物は、国立歴史民俗資料館(千葉県佐倉市)の特別展で「海のコンビナート出土」として紹介されたほか、現在建設中の「(仮称)歴史と未来の交流館」でも展示される予定です。